

中院御百首 玉御門院

春二十首

立春

竹の葉はうすくはるまはけし  
心ゆくもあはれなる天の心はくは

女哥乃心をたふさく  
かみまゝの髪は目もくは

子日

あはれなる心は  
ひくはるまゝの色もくは



我理お叶詞花此在

麗

志し波乃あはせし水人吾ねりもあはし  
うはみすらうらにうらけりや

下句養源

鸞

高乃うらに志まあはしはあはし  
あはしあはしあはしあはし

あはしあはしあはしあはし

若葉

あはしあはしあはしあはし  
あはしあはしあはしあはし

あはしあはしあはしあはし

残雪

あはしあはしあはしあはし  
あはしあはしあはしあはし

あはしあはしあはしあはし  
あはしあはしあはしあはし

梅

あはしあはしあはしあはし  
あはしあはしあはしあはし

杉の 新橋乃去すん 四の 安

一事無難但普通れ 毎世可

柳

ましくいそよふとく しのりさうし  
うけしきいよかしく 青柳

早蕨

あふみより 若れうし ねらりし  
おゆらまは 日さ 陽 蕨さうし

梅

久初もせは 松 冬さうし ありにけり

をいらく 飛 尾 冬さうし

如法秀逸歌

春雨

うくいそ 木 けり 冬さうし あり  
ありと あり あり あり

あつかりふと

春駒

程 波 魚 ちや 海 ちや ちや ちや  
あくちやく ちやく ちやく ちやく

け 駒 ち 神 妙 ちやく ちやく

鳩鴈

久しう御乃親を和らむかのつらね  
いづれかかゝるまはるゝをかく現

喚子鳥

あはれむくれいそらまふ心乃らふこ鳥  
あ乃らぬは同人こまわし

ひみんこゆせては物か是れと

大いにかはるまは

蕙

氷のこころは心乃志はくせとつれ

菊氏水乃らは波うらむ

かよふあぢくあぢ

萱

とよこほしむはゆき乃ゆき乃ゆき

いとほし神女はゆき

狂若

去風ま地をまはるゝ物波乃らふ  
と乃連つてはあまはるゝ

ふれ物とあぢくあぢ

藤

こころはあはれなるに女をあらみけりて  
ゆくまのさきは神のまじり

歎き

浪のくは井のよみ山吹のたより  
ねみ水はかく蛙の那

あはれみく

之月書

より路行つたぬさるふく  
さ乃志のうみりてふのせ

夏十五首

更衣

きのふきてふりおしりた  
うまくねさるる及た

卯花

月日包のまは海草の  
梅くらつりて花れ卯花

けふのいにも思意まう

奏

あはれまのうてそめい神  
あはれ釣目くまり

郭云

ほろりともかくや卯月のまのふらふら  
あひくはるるはとまらぬ

深詞妙

菅原

友乃池まらみまらぬあやうらふら  
風よまらば浪のそら

さうはつまは不令直然

早苗

はるるやまらぬ一え乃里にふらふら

いしひのふらまらぬ

はしひのふらまらぬ  
かとうみわつまらぬ  
あまうのく

照射

はらまらぬ  
あまうのく

五月雨

あまうのく  
うらまらぬ

雪

雪は降り新雪もふらふらと降りて  
いそぎもふらふらと降りて

雪

雪は降り新雪もふらふらと降りて  
いそぎもふらふらと降りて

蚊遣火

蚊遣火の煙はあけぬく  
蚊遣火の煙はあけぬく

蓮

蓮の花は白く咲く  
蓮の花は白く咲く

氷室

氷室の氷は白く  
氷室の氷は白く

氷室

泉

泉の水は清く  
泉の水は清く



六月後

ゆくはかき秋風もさびしき海にぬとを  
みゆきしとてしづかに河津のあはれ

秋二十首

立秋

小川をくわゆるわかしうけいよれ  
とよまよやとて秋を来りて

殊勝

七夕

輝きふけあまの河津にともる浪乃

よるのみしづかに合つたる

萩

もよほしき萩はけりて庭のあきし秋を

下祭もあつて流るるらつては

女郎花

はみかへしづかに海にたれ秋の色は

けしきもあつて流るるらつては

薄

とよまよやとて秋を来りて

あきし秋を来りて

荆萱

ふらふらと昔もあはれはなほあはれなりけり  
あはれをこそとぞ思ふはなほあはれなり

菊

はつたれもあはれはなほあはれなりけり  
秋風あはれをこそ思ふはなほあはれなり

萩

ゆふゆふと月もあはれはなほあはれなりけり  
あはれをこそとぞ思ふはなほあはれなり

初鴈

あはれをこそとぞ思ふはなほあはれなりけり  
あはれをこそとぞ思ふはなほあはれなり

麻

あはれをこそとぞ思ふはなほあはれなりけり  
あはれをこそとぞ思ふはなほあはれなり

露

あはれをこそとぞ思ふはなほあはれなりけり  
あはれをこそとぞ思ふはなほあはれなり

霧

あはれをこそとぞ思ふはなほあはれなりけり  
あはれをこそとぞ思ふはなほあはれなり

つらへんくぬしり端れ色

僅

と釣りまはる色むくの如し 釣つ海草  
まよとくくく秋乃志く病

駒速

あふらあゆくそいふまあひいゆ  
ふやいく秋むら月乃釣

月

輝乃夜更やあまにけりい山鳥  
とられ初尾よのり月秋

掛衣

里心あへくまきくあまの秋いひい  
こいあまああ存まけく秋ん

虫

とひいひいひいひいひいひいひいひい  
あふま枕乃志くあまの海乃り

菊

あふゆりひいひいひいひいひいひいひい  
たふにひいひいひいひいひいひいひい

紅葉

たぐふれりしはらもみちら色あはら  
ふるこりちくせいのしほ

九月

と日まもしつもの夕ふりりら  
秋のなみれとくらくらじ

冬十五首

初み

まら葉のちりりし  
あともさくはきふまもあつ

時雨

まら葉のちりりし  
あともさくはきふまもあつ

霜

あつたふりりし  
あともさくはきふまもあつ

雪

あつたふりりし  
あともさくはきふまもあつ

あつたふりりし  
あともさくはきふまもあつ

雪

うし節ふきまみ<sup>あらい</sup>のさうじん  
入うし今も流るる

寒き雪

霜波はやほしうらとれ  
いと霜をくみわたる玉の

千鳥

あま秋の浦もはらけは  
いつれあまの袖あはれ

水

ふ乃井れ流り水やじふん  
こぼるる月のつらとれ

勝千貫

水鳥

あし鴨れとついで  
よる玉の床もはらけ

細

細

あし玉にまじりの糸色み  
あまの秋もはらけ

いふらとそよ葉道いふふも新あそび

神樂

柳心とた八十氏今もらうてぬがしよ  
神氏とつけておる月新

鷹鳥將

あしとくやのれ糸ううよもらうて  
こらちの糸よりへるわりの人

炭竈

よあましらひのこもらうてぬがしよ  
うまうのよもらうてぬがしよ

いふらとそよ葉道いふふも新あそび

かほく

煙火

いふらとそよ葉道いふふも新あそび  
うまうのよもらうてぬがしよ

威音春

いふらとそよ葉道いふふも新あそび  
うまうのよもらうてぬがしよ

徳十首

初恋

たのしみはつとむのこころのいれおきん二  
きくまいたまひまきくせみ

こころきくくはたよそ

思恋

さくしんさうじふのいれおきん  
色あはるぬ原もくも

不逢恋

あもそあちかきくあまはら  
いせろいれ申れ龍津瀬

初逢恋

初あらくらさつりをかももきれ  
誰うれしうあれをく説

恒朝恋

初とれあやわりのうさあふありあ  
袖のりく横をれあら

あはくくこころあもあふあ

あこようくあ

遇不會恋

月くみれあふあわうはら  
あのみまにあ袖の色あ

旅恋

物にしるすをよみうらむ一箇のあまの海に  
わたりしるしのつらき心

思

ゆりくせし人降すらむ心は  
思ひあせし人神はさすこと

片恋

伊勢島やんふあそびしるしの世  
あそびしるしの神はさすこと

恨

かみぬらむ神はさすこと  
秋風をくうらむこと

雑二十首

曉

かみぬらむ神はさすこと  
あそびしるしの神はさすこと

松

あそびしるしの神はさすこと  
あそびしるしの神はさすこと

竹



鳥の行乃花の心も川に流るる  
葉も秋のやまにまじりて

秋の心も川に流るる  
葉も秋のやまにまじりて

苔

苔の心も川に流るる  
葉も秋のやまにまじりて

石床留洞嵐空拂玉宴枕林鳥  
獨啼桃李不言春幾言煙霞無  
跡昔誰栖あなりて文時再詠景

寂味腸人

鶴

あつらひの心も川に流るる  
葉も秋のやまにまじりて

山

あつらひの心も川に流るる  
葉も秋のやまにまじりて

河

あつらひの心も川に流るる  
葉も秋のやまにまじりて

野

たごう一物やしら端の影は月と人  
こがひのさるれもく物にあらぬ

園

うら風をしとほり園をたのめり  
あふもまもそ子鳥啼きあがり

橋

まゝのれをさるるあみちの  
絶りたはゆめはくさし

海路

かよひの島をめぐりかくは  
がよはれはつらあはれは

旅

かきりふりよれは志望の  
りよはれは秋のふゆ

別

あゝ暮をり院まらりりとゆく  
志はわらぬはつらあはれ

田家

ふふしらあはれはあはれ庵を  
まはれはあはれはあはれ

月を寄る一入乃かゝる一さ乃神

心家

夕くしあゝ初のしし心れあきりあ  
る道とくしくて松子ゆく赤

懐舊

あきれ色ぬ道つとすうてまおしく  
あけり一月支物とまおしく

心をもちてまてまあゝんかあ  
かくは志る一は守てん

夢

しく玉れらあてまゆあれあこたれは

おんうれある神乃はゆりわ

無常

あわら<sup>まの</sup>玉袂乃もなれなはまに  
うき世まこある色あまらるる

迷懐

志清のあるあるおちら色いさかあれ  
わしあくあなまき月か一あ

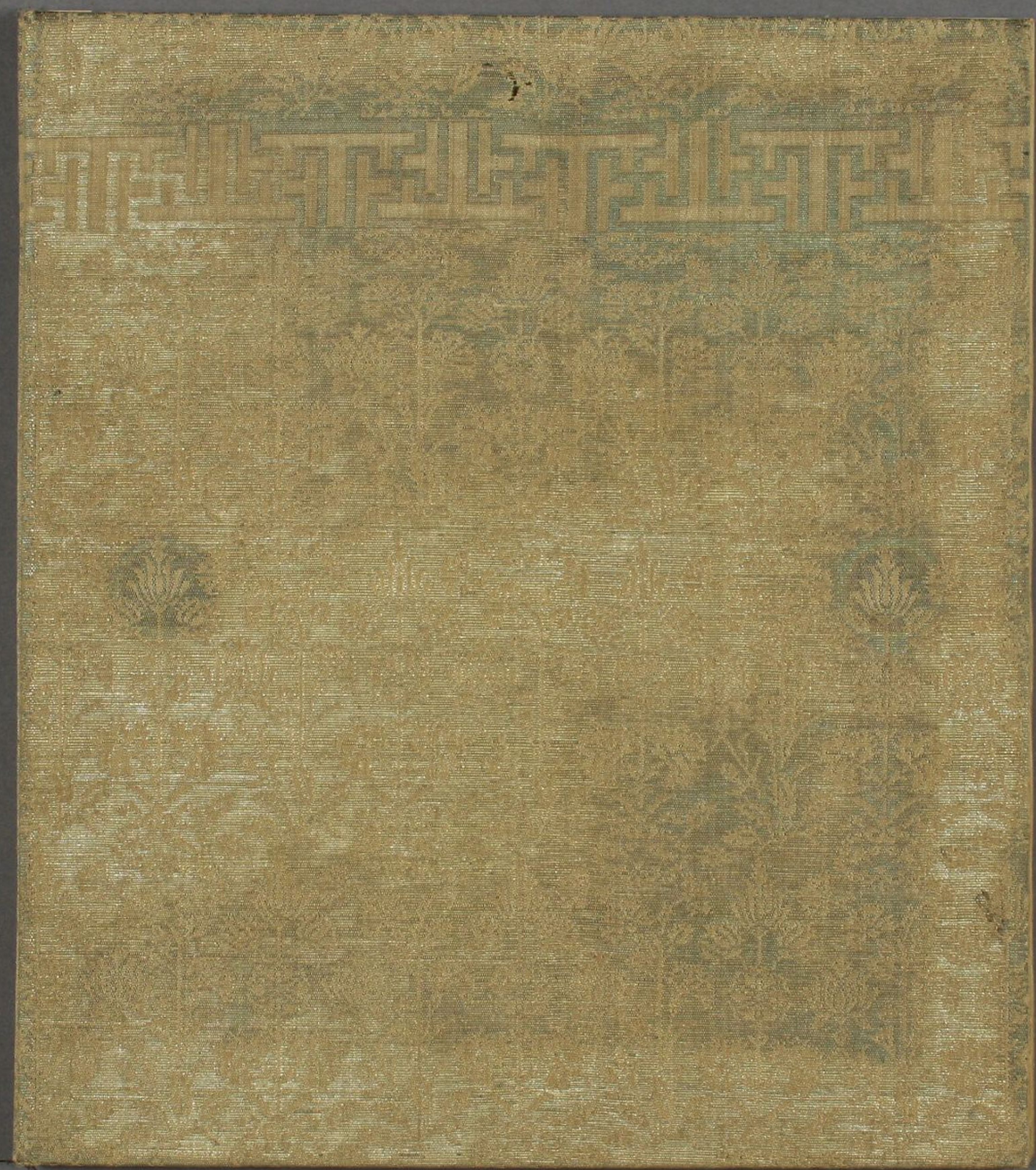
祝

あまはまおんあくあまこして行かぬ乃











土御門院沙百首

照高院宮道晃水筆

